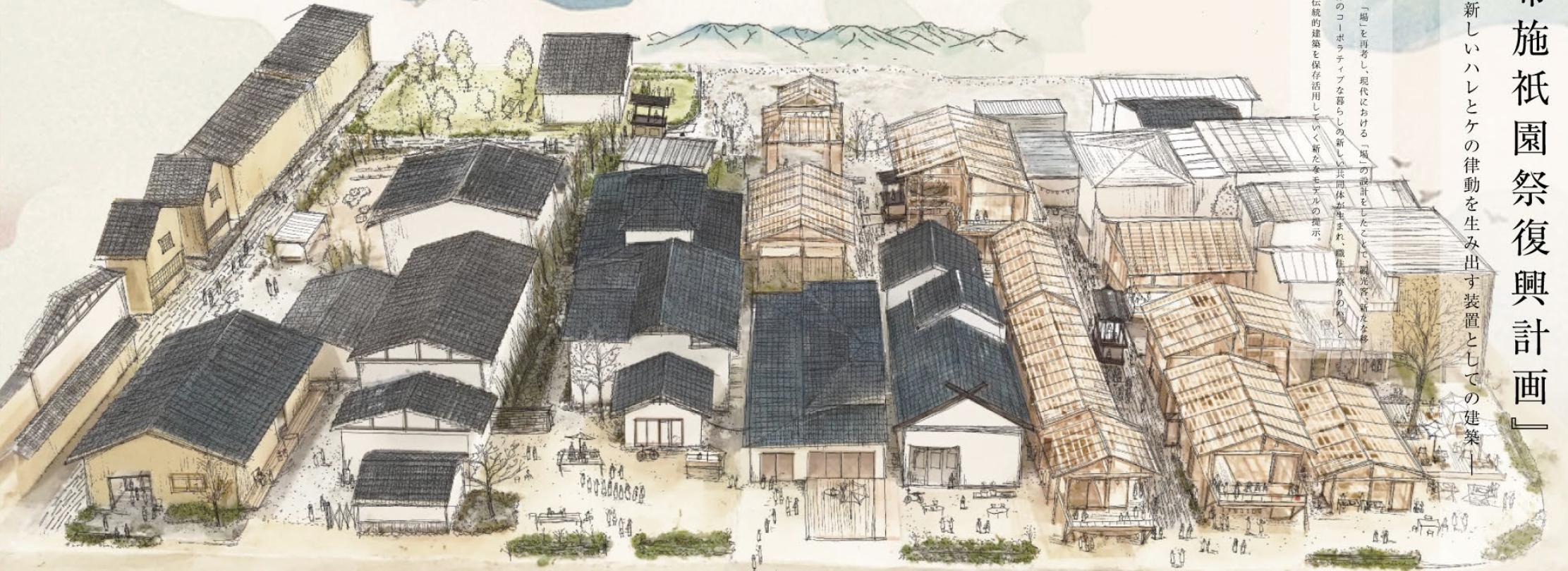


# 『小布施祇園祭復興計画』

—新しいハレとケの律動を生み出す装置としての建築—

失われてしまった「場」を再考し、現代における「場」の設計をしたことで、観光客・新たな移住者による職住一体のコープラティヴな暮らしの新しい共同体が生まれ、職住一体のハレとケが律動しながら、伝統的建築を保存活用していく新たなモデルの提示。



## 01. 失われた「共同体」と「場」

人々のライフスタイルの変化に伴い、老舗の店舗へと多くの路地が井戸や便所などの共同生活空間としての役割を果たしていかず、通路や要道を持つような伝統的住宅の増改築が行われたことで路地などの共同生活空間は喪失し、共同体が失われてしまつたなどの地域のコミュニティの「場」が失われつつある。

一方、「個別化」や「ライフスタイルなどを共有する新たな共同体」が出現し始めるなど、建築家による新しい時代の価値観を創造する試みなどの動きが顕著に見られる。

昨年夏の安藤忠雄建築研究所のインターンで、伝統的な共同体の残る奈良県井町の研究をして、その結果井戸などの共同生活空間だけではなく、都市と建築のつながりで「場」がおつくられてくることの部分が分かった。そこで、喪失してしまった「場」を再考し、新しい共同体が生むことで新しく現代における「場」を構築することができるのではないか。と考える。



## 02. 「間」と「場」と「ハレとケ」

### 「間」を持つ日本建築の分析

風呂と地面や庭と広がる間に圍して、日本の建築の寺院・数寄屋建築・民家を見られる「間」を分析した。寺院・数寄屋建築は柱によって空間を変化させ、民家は土間によって空間が変化してきた。下図のような関係で表すことができるのである(図5.1)。

### 屋根と床の間の関係性

屋根と地面の間とは(図5.2)示すように建物によって様々な「間」が作られていく。図式を作ることができる。地面の上に作られた庭や縁側、屋根の下の土間、居間など様々な「間」が存在する。

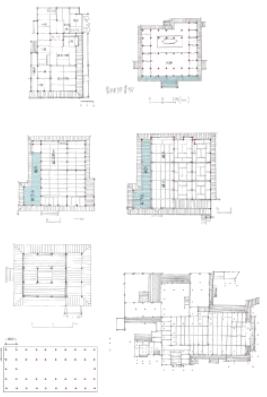
### interactive floor

#### (状況によって変化する床)

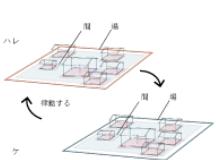
祭りや商業といったハレ・日常生活などを兼ねた「場」は「間」が変化することによって異なることがである。ハレとケは常に空間を経験する。日々の日々は狭まる、それと広がり、ケの日々は狭まる、それと広がり、そして変化する床=Interactive Floor」と捉えることができる(図5.3)。

### 「間」と「場」と「ハレとケ」

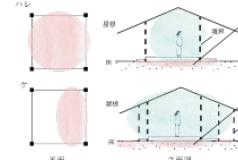
建築物一つが間である。考えると、それが多く集まつた都市的な建築も場として扱えることがある。ハレとケは常に繋り渡してくることから、「ハレとケ」が律動する」と定義する(図5.4)。



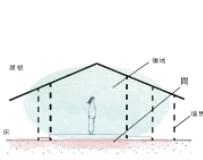
平面の柱と緑樹・間の関係性の考察



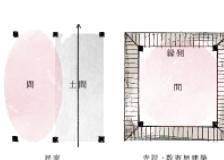
(fig.4)「間」と「場」と「ハレとケ」の関係性



(fig.3)屋根と床の間の関係性



(fig.2)屋根と床の間の関係性



(fig.1)民家と寺院・数寄屋建築の空間構成



今井町の灯火会  
ベネチアビエンナーレ  
「en」:新たな共同体

## 共同体が残された小布施

敷地は、長野県小布施町の中心街。小布施は伝統的建築物群保存地区よりも自由にまちを構築する「修景」という手法を用いて、現代的な商業と伝統的な町を再構築しようとしている。このまちづくりによって伝統的な共同体が残されており、小布施独特の「間」が今でも残されている。「間」に着目し、2年間かけて小布施の中心街区の地上1mの地点の「小布施の暮らし調査図面」(fig.1)を作成した。



## 04. 事例調査 小布施堂の事例

栗葉子店・小布施堂の歴史がほとんど古める街区の改修は主に2期に分けられる。初期・中期を含む「五者会議」を設置し、栗の間伐材を使つた屋造、古い蔵と新しい建築が調和した趣ある街並みが完成した。  
「栗舎」は、大きさは高さ4.7×0mm、幅2100mm、奥行3300mm、ある二輪の車両が通り抜けできる。その奥には生活空間がある。

## 小布施のハレ

「紙園祭」江戸時代から明治初期に見留し窓に作成した北斎筆の立体彫物である。大きさは高さ4.7×0mm、幅2100mm、奥行3300mm、ある二輪の車両が通り抜けできる。その奥には生活空間がある。

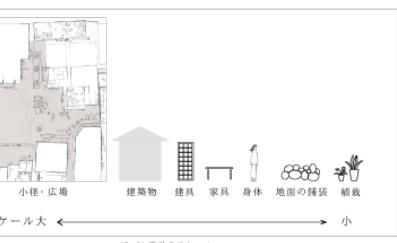
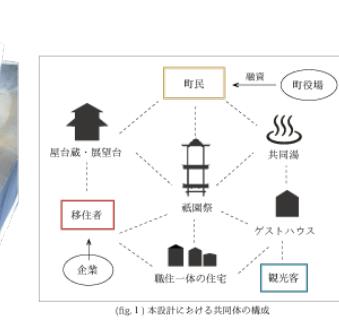
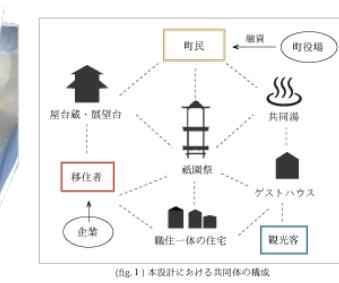
## 小布施のケ

「日常生活」市民が小布施の自然や文化とともに暮らす、観光客がおもむろに散策している。



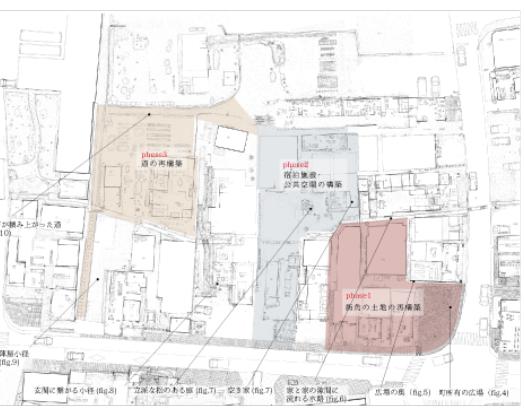
## 07. 全体計画

小布施の地上1mの暮らし調査図面(以下「図」)を元に現存と新設部分等個別に扱い、「日本の伝統建築の間」の開闊などと用いて、またスケール、建築、家具、そして、移住者の住宅、商店、共同湯、共同浴場などを設計を行っていく(図.1)。プロトコムとしては、既存の商店・小便所・広場・煙・水路などを活用し、居住一体の住宅・ゲストハウス・共同浴場・共同湯・居台・露台・通の設計を行なう(図.2)。

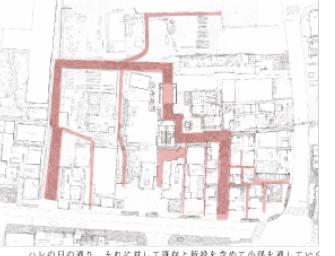


## まちづくりのスキーム

小布施町の事例を参考に、商業と生活空間が乱雑化してしまった街区全体(図.1)を新しく修景する(図.2)。修景になつてから土地権利者をまとめて、公共的な場にならざる様に3段階の計画から作られていく。新設と調査によつて分かつた現在の状況から既存建物や底地、道を等価に扱うことで、小布施の今までの系譜の中でも新しい場づくりを目指す。

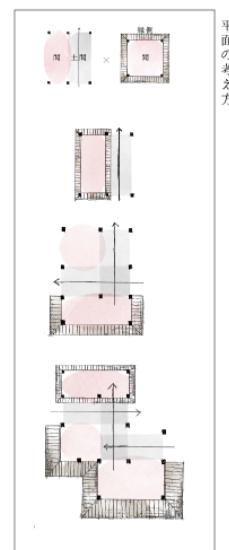


まちに対して小径や広場を多様に入り組ませることで、様々な場を生み出す。



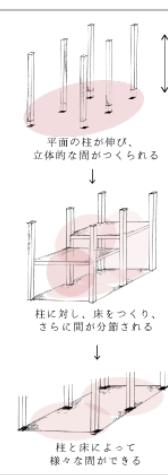
建築物の設計

小径と広場の間には建てるようにして配置を決め、景観に配慮しながらヨームとした。小径から内側へ向けて、店舗や客室など小径を囲むようにして配置した。小径から既存の間の関係性を既存建物・建物内部・建物外縁などと共に考慮し、設計した。

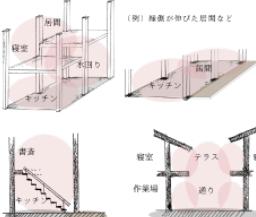


平面の考え方

立体的な間がつくられ、より複雑な「場」が生まれる。



立体的な間がつくられる、より複雑な「場」が生まれる。



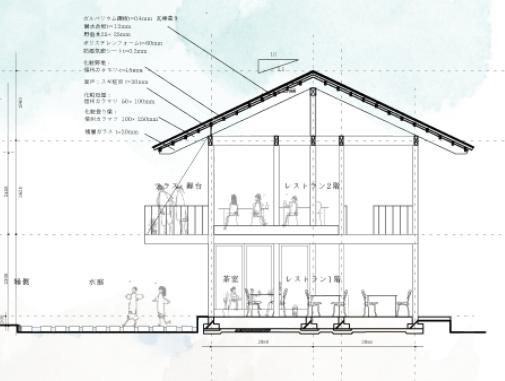
(例) 棟脚が伸びた居間など  
柱と床によって様々な間ができる

「間」(Fig.1)の土間・縫割部分を組み合わせる。柱によつて一つの間を作る。柱に沿って床をつくり、さらに間に分節される。それらが重なり増えていくことで、平滑的に広がる共同体の居所となる「場」がつくられるべく。



ケの日の小径&広場

ハレの日の小径&広場



scale 1:75 レストラン新規詳細図

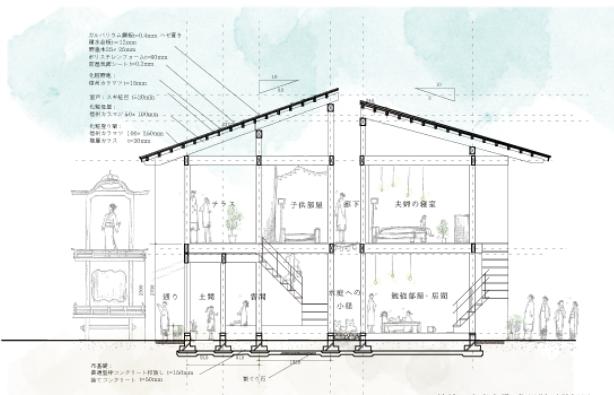
職住一体の住宅の断面図  
ハレの日



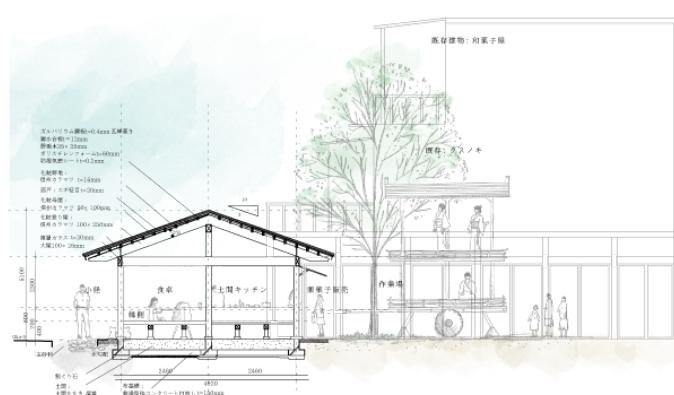
ケの日



日常的には、店から居間や寝室、客間までが繋がっており、開いたり閉じたりしながら一体として使うことができる。

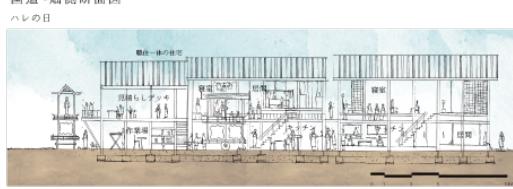


scale 1:75 地域の産直市場 断面詳細図

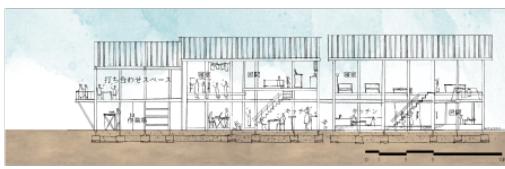


scale 1:75 地域の産直市場 断面詳細図

国道・畑側断面図



ハレの日は、居間やキッチンが開かれ、通りと一緒になる。



日常的には、ハレでもモードもある居間と移住者・町民・親友客が生息している。

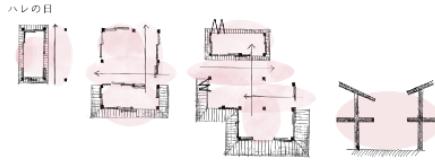


建具の設計

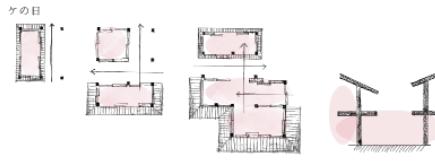
建具は、屋根と床の関係性の図において「境界」にある。図において「境界」である。



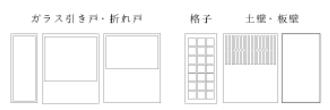
建具の設計



建具を開いて床がハレの日の舞台に変わる



建具を閉じてプライバシーを守るところと開くところと分かれる



ガラス引き戸・折れ戸



格子



土間・板壁



基本はガラスの入った建具



寝室や水回りなど



プライバシーが必要な箇所



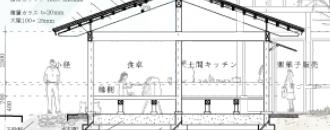
階層建物: 屋裏子屋



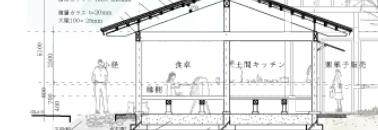
階層建物: 木造



階層建物: 木造



scale 1:75 地域の産直市場 断面詳細図



scale 1:75 地域の産直市場 断面詳細図

ハレの日



住宅の前の水庭からレストラン・茶室へ



街区内を子供たちが祭り屋台を引っ張る

「律動する場」  
既存と新設部分を等価に扱い、まち、小径、広場、建具、家具、身体の動きに至る様々なスケールの「場」の設計をしたことで、観光客・新たな移住者による団結・一体のコーギラティブな暮らしを新しい共同体が実現。繋ぎながら、他の伝統的建築を保存活用していく新たなモデルを提示した。

建物から植栽・舗装に至る「場」  
建物から植栽に至る全体をみると、土間や縁側、砂利道など小径や廣場に対する身体よりももさくスケールでの「境界」から「間」をつくりだす。人々の歩ける「間」を変化させる境界としてハレとの両方に対応するよう計画している。

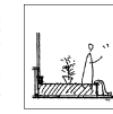
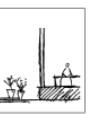
既存の植栽に加え、地面の舗装に対応させ、建具よりも柔らかい境界によって「場」をつくる

砂利道、石畳、土など小径や廣場に対する身体を感じられる境界「から間」をつくり出す。また、ハレとケで人々の距離感が変化することを考え、程よい距離感を生むよう計画している。

床の高さに変化をつけることによって身体が感じられる境界「から間」をつくり出す。また、ハレとケで人々の距離感が変化することを考え、程よい距離感を生むよう計画している。

建具を介して必要な家具の配置やす法などして建具と連携して「場」を作り出す機能を持つ。小径や広場に対して、ハレとケの日で間」の大きさが変化し、「場」のあり方が変化する。

建具を介して必要な家具の配置やす法などして建具と連携して「場」を作り出す機能を持つ。小径や広場に対して、ハレとケの日で間」の大きさが変化し、「場」のあり方が変化する。



身体



共同湯の境界としての水路と植栽



屋外市場・歩道と道路の間の人が集まる場



砂利道: 日常的に町民が集まる場



石畳: 祭り屋台が通る道



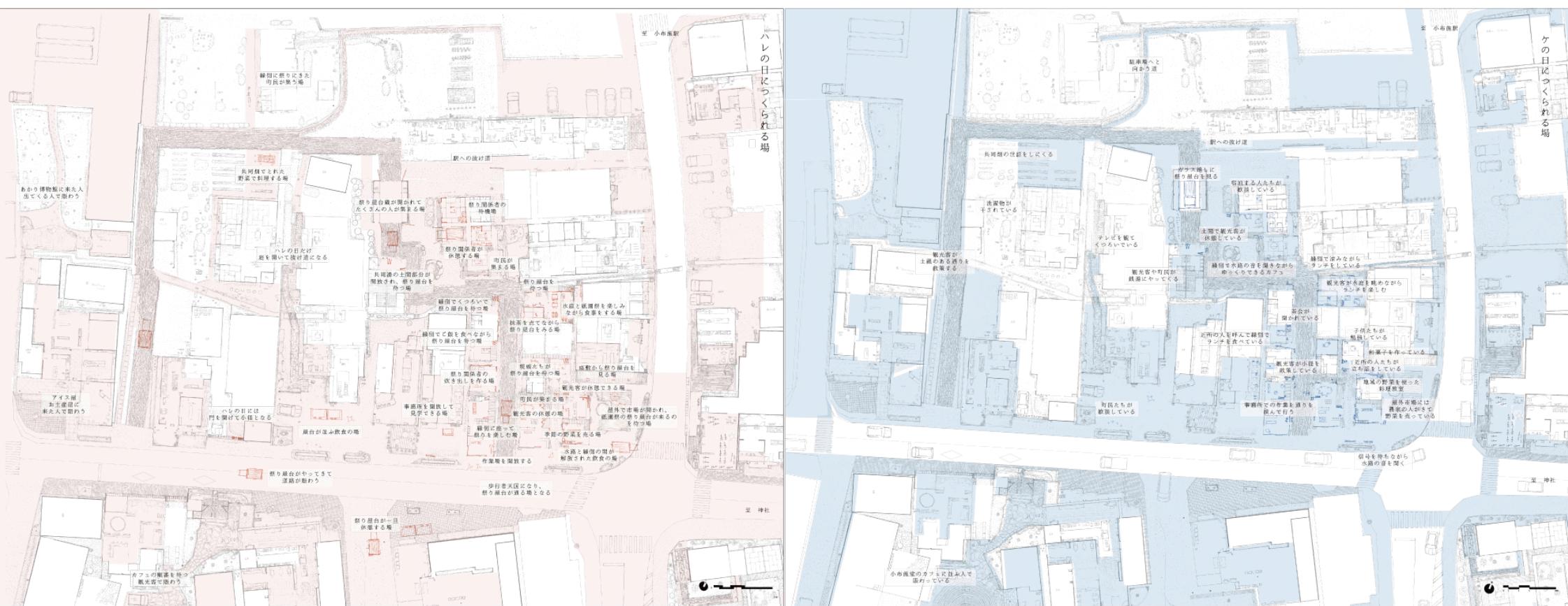
キッチンや縁側、その他の食卓が一休として使える



縁側から小径、お店へ



格子とキッチン、縁側と繋がった食卓



ケの日につくられる場



ハレの日はテラスと同じ高さに低い壁の腰壁がやってきて立ちがわらう



ケの日は通りにも事務所やお店が広がって道路のないが一体として使われ、住宅部分は建具が閉められている